

し、また佛祖統記に二宗教を持ち來れる人として記せる拂多誕の名も、前記(四)及び(五)に於るが如く明記せらるゝを以てなり。而して同様に明暗の二者を標榜して立てる二元教を稱するに、何が故に其一方をのみ二宗教の名によりて呼ぶに至りしかに就いては更に此二教各自の教義に就いて之を考へざる可らず。蓋し兩者共に二元論的宗教なるに於ては同一なるが如きも、然もゾロアスター教にては、明神が終に暗魔を克服して、終に光明の一根本に歸せしむるを要義とするに反し、マニ教にては全然兩者の歸一を認めず、終始明暗兩者の分離を説くものにして、彼のペイオ氏發見の摩尼教殘卷にも、過去現在未來の三際を通じて、兩者懸隔の旨を説けり、即ち前者は二元的とするも、其間大に一元の性質を有するものと云ふべく、是れ特にマニ教に對して二宗教の名を用ゐたる所以に外ならざるべし。

次に考がふ可きは慕闍なる文字なり、佛のシャヴィンヌ氏は、曾て前記「ネストル教とカラバルガスンの碑文」なる長篇を公やけにして、多くの史料を蒐めて以て支那に所謂摩尼教のことを説き、又た之れに關連して彼の回紇民族の遺物として有名なる、漠北オルコン河畔のカラバルガスンの碑文中に見ゆる、「慕闍」なる名に就いても説明を試みたり、而して摩尼なる語を以て、Mani 若くは Manicheism と見るは只だ之れ音聲の類似に依頼せる極めて漠然たる比定にして、何等根據の存するものに非ずとし、反りて之れを以てイスラミズムを稱せるものなりと云ひ、從がつて摩尼と緣故淺からざる回紇人は、唐代よりマホメット教の信徒なりしを説き、碑文に回紇に入りし新宗教徒として、「慕闍徒衆」とあるは、イスラム教徒と解釋すべきものなるを説きたり、之れ實に前人の曾て思ひ至らざりし所にして、此説にして若し成立するものとせば、マニ教なるものゝ東方に傳播せし事實は、根本的